

武田和昭
Takeda Kazuaki

Religious Belief in Amida Buddha and the Nenbutsu along the Shikoku Pilgrimage

The Shikoku Pilgrimage was begun by Kūkai, known as Kubi Daishi. We know this from, among other sources, the *Sangō Shiiki*, in which Kūkai expressed his desire to make a pilgrim age in Shikoku. Descriptions of the Shikoku Pilgrimage at that time are found in literary works such as the *Konjaku Monogatari* and the *Ryōjin Hishō*. From the medieval period belief in the buddhas and deities worshipped in the Kumano area (in present-day Wakayama Prefecture) spread among people making the Shikoku Pilgrimage. By the late Muromachi Period (approximately, 1336-1573) the Shikoku Pilgrimage had assumed something close to its current form. The Pilgrimage was finalized in the early Edo Period (1603-1868) by priests such as Shinnen and Jakuhon.

This presentation reports on the existence of belief in Amida Buddha and the Nenbutsu ("Namu Amida Butsu," an expression of faith in Amida Buddha) in Shikoku Pilgrimage temples in the late Muromachi and early Edo Periods. In the late Muromachi Period, pilgrims left graffiti such as that on the main image of Kokubunji Temple in Sanuki Province and in the hall of Ichinomiya in Tosa Province. These include the phrases "Namu Daishi henjō kongō" (expressing faith in Kōbō Daishi) and "Namu Amida Butsu," making clear that at the time pilgrims held belief in Kōbō Daishi and Amida Buddha. In addition, the priest Chōzen, who made the Shikoku Pilgrimage in the early Edo Period, wrote in his *Shikoku Henro Nikki* (Shikoku Pilgrimage Diary) that he had read sutras and chanted the Nenbutsu at each of the temples along the route. Also in early Edo, belief in *Kakuya Nenbutsu* (visiting different temples at night to recite the Nenbutsu) was popular, based in Pilgrimage temples such as Taisanji in Iyo Province and Kirihataji in Awa Province. Belief in Amida Buddha and the Nenbutsu can thus be seen to have existed on the Shikoku Pilgrimage.

In Shinnen's *Shikoku Henro Kudoku-ki* (Record of Merit Gained on the Shikoku Pilgrimage, completed in 1690), he noted that an odd legend about Kōbō Daishi, naming his father as Toshindayū and his mother as Akoya-gozen, was widespread in Shikoku. This was based on an oral narrative recorded in *Kōbō Daishi Konpon Engi* (a history of the life of Kōbō Daishi). This history was created by a Nenbutsu priest who was connected with the temple of Kōya-san and with Iyadaniiji Temple and Shirakata Byobugaura in Sanuki Province. It was recited in various regions and gave impetus to the popularization of the Shikoku Pilgrimage among the common people.

はじめに

四国辺(遍)路の淵源は『三教指帰』などから弘法大師空海に求めることに異論はなからう。その後、『今昔物語集』や『梁塵秘抄』などに記される四国の辺地修行、さらに中世の熊野信仰との係わりなどが想定され、室町時代末期から江戸時代初期ころに現行に近い形態の四国辺路が成立したと考えられている^{注1}。そして江戸時代前期の真念・寂本などにより四国八十八ヶ所遍路が完成され、明治初年の神仏分離を経て現在に至るのである。ここでは室町時代末期から江戸時代前期ころの札所寺院に阿弥陀・念仏信仰の存在を探り、四国辺路の展開を考察したい。

一、札所と阿弥陀・念仏信仰

まず真念『四国徧礼功德記』贅録に

遍礼の事、或人のいへるに、大師の御記文とて伝ふるに、身を高野の樹下にとどめ魂は都卒の雲上にあそばしめ、所々の遺跡を検知して、日々の影向をかかずとあり、此文世の人信じあへる事にて、人々の口耳にとどまる事なんぬ。御遺跡へは大師、日々御影向あるにより、八十八ヶ所の内いづれにてぞは大師に直にあひ奉るといひなせるは、此よりなりと。予江戸にありし時、ある人のいふをきけば四国遍礼すれば大師にかならずあひ奉ると聞しにより、われ遍礼せし時、日々心をかけて、けふはけふはと待しに、廿一日にてありしに、あんのごとく大師にあひ奉り

しこそ有がたけれど、手をあはせてかたりける。予いか様のすがたにて
ましましけるやといひければ、くろきぬのころをもめしけると覚へ、征
鼓を御額にかけさせ給ひ、念仏を申とをり玉へり。征鼓は見つれども、
御顔は見ず、ただめをとじおがみ奉る計にてすぎぬとなり。此たぐひ又
おほし。

とある。大師の御記文とは

ト居於高野之樹下 遊神於都率之雲上

不闕日々之影向 検知処々之遺跡

のことである。つまり弘法大師は肉体は高野山奥の院に入定しているが、魂
は都率天（弥勒浄土）にあり、毎日自ら修行した地に現れる（影向）とい
うもので、これは平安時代にすでに確認される^{（注2）}。鎌倉・室町時代になると
弘法大師御影の上部に賛として記されることが多いので、中世には大いに流
布したものであろう。それが江戸時代前期、真念が活躍する頃には弘法大師
が四国八十八ヶ所に日々影向するので、八十八ヶ所のうち、いずれかで弘法
大師に出合えるというように展開している。真念が江戸にいた時、ある人か
ら聞いた所によれば、二十一日目にして弘法大師に出合ったという。真念が
どのような姿かと聞けば、その人は黒衣を着け、頸から鉦鼓をぶらさげ、念
仏を唱えていたというのである。この姿はまさに『一遍聖絵』に描かれるよ
うな念仏聖とみてよからう。これが江戸時代前期ころの四国遍路における弘
法大師に対するイメージであつたのだ。つまり念仏信仰が根底に存在したの
である。これを根拠に札所寺院などにおける念仏信仰をみてみよう。

（1）太山寺蔵絵像版木^{（注3）}

五二番・伊予太山寺に蔵される絵像版木は一面に阿弥陀如来、他の面には
不動明王が陽刻されているが、阿弥陀如来面には

歸真慈阿弥禅定門靈位

為三界萬靈六親眷屬七世父母

とある。さらに阿弥陀如来の脇に「空海」と陽刻されている。不動明王面には

永正十一年^{（注4）}八月八日敬白
豫州道後太山寺 宥信

とあり、この版木が永正十一年（一五一四）まさしく太山寺に於て開版され
たことが分かる。「阿弥陀仏」の文字は六字名号を意味しており、そこに
「空海」の文字が彫られていることの意味は大きい。

（2）讃岐国分寺と土佐一宮の落書^{（注4）}

辺路が札所寺院に立ち寄った時に本尊や厨子などに落書きをしたらしく、
その痕跡がいくつか残されている。

（八〇番・讃岐国分寺本尊）

丈六の千手観音立像の腹部や腰辺に「南無大師遍照金剛」、「為二親南
無阿弥陀仏」などの他に、つぎのようなものもみられる。

同行五人 大永八年五月廿日

・山谷上院・

四州中辺路同行三人

六月廿〇日 三位慶信

（三〇番・土佐一之宮内陣）

元龜二年六月五日 全松

高運法師 光勝禅門

藤次郎 四郎二郎

無阿弥陀仏

道慶禅門 六郎兵衛 四郎二郎忠四郎
妙才 妙勝 泰法師 為六親眷屬南

とあるという。ここには明確に「南無阿弥陀仏」の六字名号がみられるので
ある。これらにより室町時代末期ころの四国辺路は弘法大師信仰とともに念
仏信仰が行われたことが考えられる。

（3）澄禅『四国辺路日記』中の念仏信仰

澄禅『四国辺路日記』は四国辺路の歴史的な研究は元より、江戸時代前期
の四国の宗教事情を知る上で、まことに有り難い資料である。承応二年（一
六五三）、九一日間に及ぶ札所巡拝の中で各社寺において、どのような経を

読んだのであろうか。土佐の室戸崎付近で「各聚砂為仏塔ノ手向ヲナシ読経念仏シテ巡リ…」とある。また新田ノ五社（三七番・岩本寺）では「札ヲ納、読経念仏シテ…」とある。ここでは経を読み、その後に念仏を唱えたと解釈できよう。さらに六五番・三角寺の奥院（仙龍寺）では

乗念ト云本結切ノ禪門住持ス。昔ヨリケ様ノ無知無能ノ道心者住持スル
二、六字ノ名号ヲ直ニ申ス者ハ一日モ堪忍不成ト也。：

とある。ここで澄禪は六字の名号を唱えようとした時、元結切りの禪門に咎められたのであろうか。あるいは澄禪自身が禪門に対して堪忍できなかったのであろうか。ともかく「新田の五社」のことと合わせ、澄禪が念仏信仰をもっていたことは明白である。

なお澄禪は悉曇学の学匠として浄嚴和尚や慈雲尊者と並び称されるが^(注5)、澄禪の師・運敵が記した『十如是臨本跋』^(注6)には運敵が澄禪のことを「法師澄禪」と呼び、その足跡について「一鉢一錫行李蕭然たり、名山靈区徧歴せざるはなし」とある。澄禪は梵語の能書家であるとともに各地を遍歴する遊行僧的な一面があったとみられる。そうすれば澄禪が各札所で念仏を唱えたことが理解できよう。

(4) 隔夜念仏供養碑の遺品^(注7)
伊予・太山寺の本堂の傍らに次のような石碑が建立されている。

裏面	延宝四丙辰年八月廿五日 太山寺
向 左	三界無縁法界萬靈 石手寺
正 面	南無阿弥陀仏 願主 河内国錦郡 徳誉清心
向 右	五百日隔夜念仏廻向 谷上山

「五百日隔夜念仏廻向」とあることから、この碑は隔夜念仏信仰によるものと推察される。隔夜念仏とは『元亨釈書』^(注8)などによれば「空也上人が長谷に籠り観音のお告げで前世に調い置いた大般若經の水晶の軸を尋ねて信心を増し、春日から長谷へ千日参詣の願を立てて春日に一夜、長谷に一夜、夜を隔てて泊まり、三年三月の間念仏の弘通を祈らせた。」これが起こりとなり、一方の寺に一夜、他方の寺に一夜宿泊して念仏行をすることが各地に広まったといわれる。これに従い、先記した太山寺の隔夜念仏供養碑をみると、延宝四年（一六七六）に太山寺―石手寺―谷上山（宝珠寺）を往復する隔夜念仏が行われたのであろう。おそらく鉦を叩きながらの念仏行とみられる。この他にも四国内に、次のような隔夜念仏の供養碑が確認されたいう。

天和三年（一六八三）

○百日隔夜念仏―讚岐・雲辺寺建立（雲辺寺―蘆峯寺―観音寺）

○百日隔夜念仏―阿波・切幡寺建立（切幡寺―靈山寺）

○千日隔夜念仏―伊予・太山寺建立（太山寺―石手寺―谷上山）

天和四年（一六八四）

○百日隔夜念仏―伊予・仙遊寺建立（国分寺―佐礼山―円明寺―三島―泰山寺―一宮―八幡宮）

泰山寺―一宮―八幡宮）

元禄二年（一六八九）

○三百日隔夜念仏―伊予・仙遊寺建立（府中七ヶ所）

元禄三年（一六九〇）

○五百日隔夜念仏―土佐・行当岬付近建立（金剛頂寺付近）

以上のように、現在四国内に隔夜念仏信仰に係わる建立碑は七ヶ所が確認される。これらの全てが現在の四国八十八ヶ所の札所寺院であることは注目しなければならない。では隔夜念仏僧は隔夜念仏を修行するのに何故これらの寺院を選んだのであろうか。間違いなくそこには念仏僧を引きつける土壌が存在したからだろう。つまり江戸時代前期のこれらの寺院には念仏僧を受

け入れる基盤があり、他国の念仏行者が容易に寄寓し、修行できる環境があったに違いない。換言すれば札所寺院のいくつかは念仏寺院の要素を持ち得ていたとみることができよう。このような形態に至るには、かなりの時間を要したことはいうまでもなからう。そうすれば澄禅や真念も伊予・土佐の札所やその道中で、鉦を叩きながら念仏を唱える隔夜念仏僧に出合ったことが考えられる。特に真念の遍路行は供養碑が建立された延宝く元禄年間と合致しており、その可能性はかなり高いといえよう。そのことは冒頭に記した念仏聖の姿をした弘法大師に対するイメージに繋がるものかもしれない。

(5) 真念『四国遍路道指南』の詠歌

江戸時代の四国遍路に大きな影響を及ぼした真念法師の業績で特筆されるのが道標の建立と四国遍路のガイドブックともいふべき『四国遍路道指南』の刊行であろう。後者には遍路の心得や札所での作法が細かく記されている。その中に各札所では

男女ともに光明真言、大師宝号にて回向し、その札所の歌三遍よむなり。……

とある。つまり光明真言と大師宝号とともに詠歌を三遍読むというのである。現在の作法とはかなり異なるが、おそらく真念の時代にはこれが正式のものとしていたのであろう。ここで興味深いのは詠歌を三遍読むことである。詠歌は元来その寺の本尊を称えるものと考えられるが、ここでは本論の主題に沿い『四国遍路道指南』中の詠歌で阿弥陀・念仏信仰(註)に係わるものを抽出してみると、およそ二〇首が数えられたが、そのいくつかを記してみよう。()内は本尊名

二番 極楽寺(阿弥陀如来)

極楽の弥陀の浄土へ行きたくば南無阿弥陀仏口癖にせよ

一六番 観音寺(千手観音)

忘れずも導き給え観音寺西方世界弥陀の浄土へ

四四番 大宝寺(十一面観音)

今の世は大悲の恵み普生山ついに弥陀の誓いをぞ待つ

五八番 仙遊寺(千手観音)

立ち寄りて佐礼の堂にやすみつつ六字をとえ経を読むべし

七八番 道場寺(阿弥陀如来)

踊りはね念仏申す道場寺拍子揃え鉦を打つ

八七番 長尾寺(聖観音)

足曳の山鳥のをのなが尾寺秋のよるすがら弥陀を唱えよ

この他にも阿弥陀極楽世界のことが歌われた興味深いものがいくつかあるが略する。

さて先記したなかで、問題とすべきは本尊が十一面観音や千手観音などであっても阿弥陀如来・念仏のことが歌われていることであろう。中でも五八番・仙遊寺(本尊千手観音)では「…六字をとえ経を読むべし」とあり、明らかに南無阿弥陀仏の名号を唱えるのである。ここに札所における念仏信仰の広がりを知ることができよう。

なお七八番・道場寺では「踊りはね念仏申す道場寺拍子揃え鉦を打つ」とある。これは『一遍聖絵』などにみられる踊り念仏を彷彿とさせるものであるが、はたして真念の時代に道場寺で踊り念仏が行われたのであろうか。澄禅『四国辺路日記』にも真念『四国遍路道指南』にも、それらしき記述はまったくみられない。詳しい内容が不明のため、判断に迷うが、この歌は真念よりも古い時代(註)の寺の様子を表している可能性も視野に入れねばならない。

このように本尊が阿弥陀如来である場合は当然として、阿弥陀如来が本尊でない札所寺院でも阿弥陀如来や念仏のことが数多く歌われていることは、真念以前には阿弥陀・念仏信仰が四国にかなり広がりを見せていたと推察されるであろう。

四国辺路の中に念仏信仰とは、やや違和感を覚えるかもしれないが、隔夜念仏信仰があったことは明白であり、さらに真念『四国遍路道指南』贅録に

みられる「首から鉦を吊り念仏を唱えたという」弘法大師の姿は念仏信仰の象徴的なものといえよう。

以上のことから室町時代末期から江戸時代前期にかけて、札所寺院において阿弥陀・念仏信仰が明確に存在したことを確認しておきたい。

二、奇異な弘法大師伝の広がり

次に真念『四国徧礼功德記』付録をみてみよう。

然るに世にしれ者ありて、大師の父は藤新太夫といひ、母ハあこや御前といふなど、つくりごとをもて人を售。四国にはその伝記板に鈔流行すときゆ。これは諸伝記をも見ざる愚俗のわざならん。若愚にしてしるものハ、むかしよりいへるごとく、ふかく憎むべきにあらず、ただあはれむべし、…

とある。これを書いたのは高野山の学匠といわれる寂本である。つまり鎌倉時代成立の『弘法大師行状図画』などにみられるように、古くから弘法大師の父は佐伯氏、母は阿刀氏の女とするのが正史の弘法大師伝であるが、弘法大師の父をとうしん太夫、母をあこや御前という奇異な弘法大師伝を作り、それを「板に鈔め」、いわゆる版本として四国に流布しているのは、まことに愚かなことだと痛烈に批判しているのである。おそらく寂本にとっては放置できず、許し難いこととして『四国徧礼功德記』の末尾に掲載し、世の人々に訴えたのであろう。

さて、この奇異な弘法大師伝とはいかなるものであろうか。まず想起されるのが『説経かるかや』『高野の巻』であろう。「説経かるかや」は「小栗判官」や「さんせう太夫」とともに室町時代末期に大いに語られた説経ものである。「説経かるかや」の伝本として、次のもの^(註1)が知られる。

○絵入写本「せつきやうかるかや」

○寛永八年刊しやうりや喜衛門版「せつきやうかるかや」

○寛文初年頃刊江戸板木屋彦右衛門版「かるかや道心」

このうち「高野の巻」が見られるのは寛永八年（一六三一）刊、しやうりや喜衛門版「せつきやうかるかや」である。「高野の巻」は『説経かるかや』のなかに、突如として弘法大師の一代記が語られるのである。その内容は大きく五段に分けられる。簡単に要点を記してみよう。

「弘法大師の母は唐の帝の娘であるが、ある時、空舟で日本に流され、讃岐国白方屏風ガ浦に流れ着き、とうしん太夫が拾いあげ、夫婦となって子供が誕生する。その子の名は金魚丸（弘法大師のこと）という。ところがこの子が夜泣きするので、屏風ガ浦の人達がその子を捨てよと云うので、あこや（あこや）御前は金魚丸とともに四国八十八カ所を連れて放浪するのである。その後、あこや御前は讃岐の志度寺に、ひとまず金魚丸を捨てるのであるが、和泉国槇尾のたらん和尚が拾いあげる。そして七歳になると和泉国槇尾山に登り修行し、二十七歳の時に入唐するが、そこで浄土教の祖善導大師に出会う。さらに天竺に向かい文殊菩薩との問答が長々と続き、その後には帰朝後のことが短く記され、最後に『慈尊院縁起』に係わる女人禁制を説く弘法大師空海の母の物語が説かれる」

以上が「高野の巻」のストーリーである。ここには確かに寂本が記した「とうしん太夫」や「あこや御前」のことがみられ、白方屏風ガ浦とともに留意しなければならぬ。さらに重要なことは「その数は八十八所とこそ聞こえたれ、さてこそ四国遍土は八十八か所とは申すなり」とあり、「四国遍土（遍路）八十八ヶ所」のことが記されていることであろう。従来、この寛永八年刊「高野の巻」が「四国八十八ヶ所遍土（遍路）」という文言の初出として重視されてきた。しかし近時、それよりも古いとみられる絵入写本「せつきやうかるかや」に「高野の巻」の痕跡がうかがわれるという御高説が阪口弘之氏^(註2)によって提示された。このことは四国辺路の成立や展開の問題に影響するものと思われ、今後大いに重視されなければならない。

さて、次に示されるのが版本『奉弘法大師御伝記』である。現在のところ

普通寺に唯一所蔵が確認されており、縦一三・八センチ、横三一七・五センチの巻物である。その内容について要約してみよう。

「四国讃岐国多度郡白方屏風ガ浦にとうしん太夫という獵師と唐から空舟に乗せられて流れ着いた、あこや御前の夫婦がいた。あこや御前は四十二歳になるのに子供ができないので、摂津国中山寺に祈願すると西の海から金魚が胎内に呑み入る夢を見て、懐妊しやがて子供がうまれる。その子は金魚丸（弘法大師のこと）と名付けられるが夜啼きが激しく、村人が野原へ捨てよというので、千女力原に捨てた。普通寺の徳道上人が拾い産湯に召させたので普通寺のことを誕生院という。七歳の時に福寿丸と名付け、十七歳で土佐五台山、十九歳で和泉国槇尾山に上り、やがて入唐し、惠果和尚に弟子となる。さらに天竺に向かい、流砂川で文殊が現れ問答する。大同元年八月六日に帰朝する。最後の部分は弘法大師が四国八十八ヶ所を開創し、大師みずから辺路をする。そしてその後、讃岐の大名香川氏や右衛門三郎が四国八十八ヶ所を辺路し香川氏は極樂浄土に往生し、右門三郎は願いどおり河野家に生まれるという。」

以上のとおりであるが、「高野の巻」とは冒頭部分においては、かなり異なり、末尾に「元禄元年土州一ノ宮」とある。「高野の巻」では四国八十八ヶ所をさまよい歩いた後に志度寺近くの松の下に金魚丸を捨てるが、『奉弘法大師御伝記』では、そのことはなく普通寺近くに捨てられているのを普通寺の得（徳）道上人が拾う。さらに最後は、「高野の巻」が『慈尊院縁起』つまり弘法大師の母の物語で女人禁制を説くが、『奉弘法大師御伝記』では四国八十八ヶ所の開創に係わるものでまったく異なるものである。

以上のように、寂本のいう奇異な弘法大師伝の版本には「高野の巻」と『奉弘法大師御伝記』の存在が確認された。

さて、真念の時代からおよそ三十年ほど前の承応二年（一六五三）智積院の僧、澄禅が四国辺路をして『四国辺路日記』を残している。その中の弥谷寺の項にとうしん太夫やあこや御前のことが記されており、まことに興

味深く、これを無視することはできない。関係の項をみてみよう。

劍五山弥谷寺一仏壇一間奥へ四尺二是毛切入テ左右二五如来ヲ切付玉へリ、中尊八大師ノ御木像、左右二藤新太夫婦ヲ石像二切玉フ、北ノ床八位牌壇也。……（中略）……谷底ヨリ小キ山ヲ越テ白方屏風ガ浦ニ出。此浦ハ白砂沓々タルニ一群ノ松原在リ、其中二御影堂在リ、寺ハ海岸寺云。門ノ外二産ノ宮トテ石ノ社在、洲崎二産湯ヲ引セ申タル鹽トテ外八方二内八丸切タル石ノ鹽在。……夫ヨリ五町斗往テ藤新太夫ノ住シ三角屋敷在。是大師誕生ノ所。御影堂在、御童形也。十歳ノ姿ト也、寺ヲ八幡山三角寺仏（母）院ト云。此住持御影堂ヲ開帳シテ拜セラル。堂ハ東向三間四面此堂再興セシ、謂ハ。但馬国銀山ノ米原源斎ト云者、讃岐国多度郡屏風ガ浦ノ三角寺ノ御影堂再興セヨト靈夢ヲ承テ、則発足シテ当国工来テ、先四国辺路ヲシテ其後御影堂ヲ三間四面二瓦フキニ結構ニシテ又辺路ヲシテ販国セラレシト也。又仏壇ノ左右二焼物ノ花瓶在、是毛備前ノ国伊部ノ宗二郎ト云者、靈夢ニ依テ寄付タル由銘二見エタリ。猶今靈驗アラタ也。住持ノ僧演説ナリ。……又寺ヨリ戌亥ノ方エ五町斗往テ八幡ノ社在、大師ノ氏神ナリ。……

普通寺一又大師幼少ノ時分、余リ二夜啼シ玉フトテ千入ガ原ト云所ニ捨玉フヲ、住持行合テイダキ取此寺ニテ養育シ玉フ故、誕生院ト号玉フ。……

とある。このことから弥谷寺や白方屏風ガ浦の仏母院さらに普通寺には、とうしん太夫、あこや御前の弘法大師伝が広く流布していたことが判明する。さて澄禅『四国辺路日記』の記事をみると金魚丸を捨てた所が「千入ガ原」で普通寺の住持が抱き取りとある。「高野の巻」では志度寺近くの松の下に捨てたとあるので、四国に流布していたのは「高野の巻」ではないことがわかる。

一方、『奉弘法大師御伝記』は金魚丸を「千女力原」に捨てたとするの

であるので時代的にも矛盾しない。

おそらく寂本のいう奇異な弘法大師伝の版本とは、「元禄元年土州一宮」の『奉弘法大師御伝記』をさすとみられるが、なお検討の余地がある。

しかし澄禪『四国辺路日記』は元禄元年を遡ること約三十年である。そのころ、すでに善通寺や弥谷寺、白方屏風ガ浦でこの奇異な弘法大師伝が流布していたのである。つまり版本の「高野の巻」でもなく、「奉弘法大師御伝記」でもないものが、すでに存在していたことになる。そこで考えられるのが『弘法大師空海根本縁起』という元禄十二年（一六九九）の写本である。その一部を記してみよう。

四国讃岐の国多度の郡白方屏風ガ浦に藤新太夫と申す獵師有り、其内に阿こやと申す女人座り、未四十のいんに入る迄、子なき事を悲み、俄に善根を為さばやと思ひ、我心をすくにし、すぐなる針に餌をさし、縁にまかせて魚を釣る。：津の国中山寺に参り三七日籠り、男子にても女子にても子種を壺人授け給へと深く祈誓を申したる。三七日満つる夜の御夢想に、西の海より金の魚を阿こやが胎内へ吞入るとぞ御夢想かうむり、：然るに此御子、程無夜泣をし給事限り無し、：急ぎこの子を棄よと仰ける。：御母聞召、金の魚を御夢想にえたるによつて御名を金魚丸と付給ひて、錦に包み千世の原に捨て給う。：ある時讃岐の国善通寺徳道上人折節此側を御通りけるが、：御衣の袖をのべ給ひ、善通寺へいだし取り、うぶ湯をめさせ給に依て、夫より誕生院と申す也。：。とある。続いて「空海の成長」、「空海の入唐」、「空海と文殊の間答」、「空海の帰朝」が長々と綴られる。以上は、『奉弘法大師御伝記』と殆ど変わりない。続けて最後の部分「四国八十八ヶ所の開創」に係わる部分を記してみよう。

扱又四国に八十八ヶ所を建立有て、始て辺路を三十三度、中辺路を七度させ給、中にも讃岐国香川氏と申す大明有けるか、子を持ち萬の人の軍兵を持ち、弓箭とると雖も誠に此世は一時の榮華也。扱後生を願わんと

おもひ、弘法大師を御師匠に頼み奉、永禄二年三月五日に花の泪を引かへし、もと結ゆひを切り給。：。

されは四国に三世諸仏の御宝殿八十八ヶ所を建立し、辺路を進め候得とて、日記、縁起、えんまぐうの秘密の御判を請取り、中辺路を廿一度成就し給、其友によつて香川殿臨終の刻は、八十八ヶ所の諸神諸仏悉、觀音勢し蓮台を傾け、廿五菩薩はおんかくをなし給いて極樂浄土へ来迎有るとみへて有り。：。

夫より伊予の国、川野下人に右衛門三郎と申大悪人ありけるか、大師八坂の宮へ参籠し腰を掛給へは彼右衛三郎大悪人の事なれば、大師大事の御鉢わち摧。：弘法、是をあわれと思召、日記、縁起、えん魔帝釈の秘密の御判を認め、彼右衛三郎に授候得者、右衛三郎は是を請取り、廿一度辺路を成就し、阿波のやけ山寺の麓にて形を消しけるか、：。

故に辺路を一度廻り、供養をなしたる友は高野山へ三十三度の参詣にあたる。辺路をする人に道能教、又は一夜の宿を借たる友は三毒内外のわへ不浄を遁れず、命長遠にして思事叶なり。又は五逆十惡の友成共、諸神諸仏の極樂浄土得趣へし、辺路を一度廻り、供養したる友も、地獄に落つる物ならば、炎魔帝釈九精進も共に地獄におとさんとの御誓願也。辺路を常に念づる友は、則都卒の内院上品上生九ぼんの蓮台を傾、迎ひ取り給へとの弘法大師の御誓願無疑。此縁起を一度聴聞すれば高野山江一度の参詣にあたる也。これを聴聞する輩は毎日南無大師遍照金剛と唱れば、現世あんおん後生善処三世の師、七世の父母迄も成仏する事無疑、依弘法大師空海根本縁起敬白。

元禄十二年正月廿八日 高野山千手院谷西方院内真教書之、
尤悪筆たりと雖、筆を染め書き写畢。

とある。『奉弘法大師御伝記』と比較すれば、大同小異であるが、筆者がもつとも注目する相違点は『弘法大師空海根本縁起』には「此縁起を一度聴聞すれば高野山江一度の参詣にあたる也。これを聴聞する輩は毎日南無大師

遍照金剛と唱えれば、現世あんおん後生善処三世の師、七世の父母迄も成仏する事無疑」とある。つまり「この縁起を聴聞する者」ということは、この縁起が「語り物」であることだろう。

さて『弘法大師空海根本縁起』には様々の情報が含まれているが、まず西国三十三所との関連（注）が興味深い。この縁起の冒頭に「子授け祈願に摂津の中山寺」に参詣し、そして金魚丸を拾ったのが善通寺の徳道上人としてゐる。『中山寺縁起』などの西国三十三所縁起には、長谷寺の徳道上人が重要な人物であることはいまでもなく、中山寺は西国札所の第二四番であり、長谷寺は第八番であるなど大いに関連が考えられる。また『中山寺縁起』などの西国三十三所縁起には「一度此地を踏むものはたとひ十悪五逆の人たりといふとも永く三悪道に墮せじ心厚く菩提を求めんがために此地を巡礼せば、速やかに聖衆の来迎をこうむり極楽世界に生まれ、不退転地に住すべし、…」とあり、本縁起にみられる四国辺路すれば後生善処、すなわち来世には極楽往生できるといふ共通点がみられるのである。

つぎに、四国八十八ヶ所との関連は弘法大師による四国八十八ヶ所の建立があり、弘法大師自身も四国辺路をしたという。さらに讃岐の大名香川氏や右衛三郎も四国辺路したとされ、香川氏は来世には極楽往生し、右衛門三郎は望みどおり河野家に誕生したのである。また「辺路する人に道よく教え、また一夜の宿を貸したる友は三毒内外のわへ不浄を逃れず、命長遠にして思事叶なり」とある。これは接待・善根宿の思想とみられ、現在の四国遍路に通じるものとして看過できない。

最後に本縁起の制作背景をみてみたい。つまり、いつ・どこで・誰が何の為に、『弘法大師空海根本縁起』を制作したのであるか。まず、その制作時期であるが、小林健二氏の説（注）によれば、「高野の巻」は四国地方の在地の弘法大師伝と『慈尊院縁起』（注）（弘法大師の母の物語で女人禁制を説く）が融合して成立したという。在地の弘法大師伝とは『弘法大師空海根本縁起』とみていいだろう。「高野の巻」の成立時期については先述のように寛

永八年よりも古いとみられることから本縁起の成立は讃岐の大名香川氏が元結いを切った永禄二年（一五五九）から寛永八年（一六三一）よりもさらに遡る慶長ころ（注）と考えられよう。なお、これとは逆に「高野の巻」が先行し、その後に『弘法大師空海根本縁起』が成立したことも考慮しなければならぬが、その際には時期的には、慶長ころ以降となろう。

つぎに、どこで・誰がといへば白方屏風ガ浦・弥谷寺周辺と高野山とを往來する念仏聖などによつて、白方屏風ガ浦・弥谷寺周辺または高野山で作られたと推察されよう。

そして、その目的は間違いなく、四国辺路をすすめるためのものとみられる。前半部は四国辺路をすすめるための導入部分で、肝心なことは香川氏が四国辺路して極楽往生でき、また右衛三郎は望みがかなったと云う部分であろう。そして本縁起を聞くだけで高野山へ参詣したに値するといふ。つまり高野山の弘法大師信仰の比重も大きいのである。

まとめ

讃岐国分寺の本尊や土佐一ノ宮内陣の落書などから室町時代末期の四国辺路には確かに弘法大師信仰と念仏信仰がみられる。さらに江戸時代初期には澄禪が各札所で読経念仏し、そして札所寺院を根拠地として隔夜念仏信仰が盛行していたのである。このような念仏信仰を基盤として、讃岐白方屏風ガ浦の三角寺仏母院、弥谷寺、善通寺などを中心にして弘法大師の父をとうしん太夫、母をあこや御前とする奇異な弘法大師伝が流布していたのである。それは高野山と四国を往來する念仏聖によつて作られた「語り物」の『弘法大師空海根本縁起』などに基づくもので、これが各地で語られ、四国辺路すれば後生善処が得られるという功德が説かれ、四国辺路が大いに促進されたと推察する（注）。

さて、この奇異な弘法大師伝は、澄禪『四国辺路日記』にもみられ、仏母

院が弘法大師の誕生地であるとの疑いもなく記していることから、おそらく澄禅はそれを信じていたのであろう。さらに元禄時代ころには、この伝記は四国に広く流布されたことから寂本・真念など正史の弘法大師伝を信じる高野山に關係する僧にとつて耐え難いものがあつた。そして、この奇異な弘法大師伝を排除するかのようによ貞享四年、元禄三年にかけ真念『四国遍路道指南』、寂本『四国偏礼靈場記』、真念『四国偏礼功德記』が立て続けに刊行される。

一方、これに対抗するように元禄元年に『奉弘法大師御伝記』、『奉納四国中辺路之日記』が「土州一ノ宮」の名で刊行された。これは「寂本・真念」グループと「奇異な弘法大師伝を信仰する（念仏信仰者）」グループとの争いのようにもみえるが、やがて前者が優勢となり、後者は四国遍路の世界から消えたかの如くなる。そして真念や寂本がめざした四国八十八ヶ所遍路が確立し、盛行していくのである。

だが不思議なことに江戸時代中期、末期にかけて、奇異な弘法大師伝の版本『奉弘法大師御伝記』が数多く転写されていくのである^{注10}。それは何の目的であつたのか？謎はまだ多い。

注

- 1、近藤喜博『四国遍路』（桜楓社 昭和四六年六月）。宮崎忍勝『遍路―その心と歴史』（小学館 昭和四九年六月）。近藤喜博『四国遍路研究』（三弥井書店 昭和五七年一〇月）。
 - 2、宮崎恵仁「奥之院・伽藍景観図を有する弘法大師御影図について」（『壇上伽藍と奥之院』図録 高野山霊宝館 平成一三年七月）。
 - 3、正岡健夫『愛媛県金石史』（愛媛県文化財保護協会 昭和四〇年四月）一三二〜一三三頁。
 - 4、前掲注1、近藤喜博『四国遍路』一四〇〜一五〇頁。
 - 5、宮崎忍勝『澄禅『四国辺路日記』 附・解説校注』（大東出版社 昭和五二年一〇月）八七頁。
 - 6、『智山全書』一一巻 五六七頁。
 - 7、喜代吉榮徳『四国の辺路石と道守り』（海王社 平成三年一二月）。
 - 8、奥村隆彦『融通念仏信仰とあの世』（岩田書院 平成一四年一〇月）一七四〜一八四頁。
 - 9、喜代吉榮徳『四国辺路研究』創刊号（海王社 平成五年三月）に「伊予における隔夜信仰と辺路信仰」が掲載され、その中に伊予の札所の詠歌について考察されておられる。
 - 10、札所の詠歌については真念『四国遍路道指南』のなかに八十八ヶ所のすべてが掲載されている。これについては白井加寿志氏は「四国遍路「八十八ヶ所」起源考―付その奉唱歌起源考―」（『郷土文化サロン紀要』一 高松市立図書館 昭和四九年一二月）で詠歌の成立について、真念あるいは真念達ではないかと考察されておられる。
- なお内田九州男氏によつて紹介された『奉納四国中辺路之日記』（『資料紹介『奉納四国中辺路之日記』―『四国遍路と世界の巡礼研究プロジェクト』平成一〇年三月）にも札所の詠歌が掲載されている。両者を比較すると二、三を除きほぼ同様であるが、内田氏は『奉納四国中辺路之日記』

は元禄元年の制作であるが、これに先行し、かつ内容面でよく似た日記がかなり広がっていたのではないだろうかと考えておられる。

また『弘法大師空海根本縁起』の中に讃岐の大名香川氏や右門三郎が四国辺路に出る際、「日記、縁起、えんま宮の秘密の御伴を認め」とある。日記とは内田氏が紹介した『奉納四国中辺路之日記』のようなものであり、縁起とは『奉弘法大師御伝記』に類するものと思われる。「えんま宮の秘密の御伴」については不明だが、かつては、この三点を持参して四国辺路に出たのであろうか。

11、小林健二「説経「かるかや」と「高野の巻」」(『講座日本の伝承文学』第三巻―『散文文学物語の世界』三弥井書店 平成七年一〇月)、室木弥太郎校注『新潮日本古典集成・説経集』(新潮社 平成一〇年二月)。

12、阪口弘之「説経「かるかや」と高野伝承」(『国語と国文学』七一巻一〇号 平成六年一〇月)。

13、吉井敏幸「西国三十三所の成立と巡礼寺院の庶民化」(浅野清編『西国三十三所霊場寺院の総合的研究』中央公論美術出版 平成二年二月)。

14、前掲注一―小林健二「説経「かるかや」と「高野の巻」」。

15、室木弥太郎『語り物(舞・説経・古浄瑠璃)の研究』(風間書房 平成四年四月)二九七頁。

16、拙稿「四国辺路と阿弥陀・念仏信仰―念仏信仰の遺品を通して―」(『文化財保護協会報 平成十九年度特別号 香川県文化財保護協会 平成二〇年三月)。

17、拙稿「『弘法大師空海根本縁起』について―四国八十八ヶ所辺(遍)路の成立をめぐって―」(『調査研究報告』香川県歴史博物館 平成一九年三月)。

18、版本『奉弘法大師御伝記』に類する写本が次のように知られる。

◎『弘法大師御伝記』(嘉永二年写・個人蔵)

◎『南無弘法大師縁起』(文久四年写・個人蔵)

◎『弘法大師縁起』(寛政七年写・香川県立図書館)

◎『弘法大師御縁起』(宝暦七年写・個人蔵)

◎『弘法大師御伝記』(寛政二年写・個人蔵)

このほかにも二―三本が知られ、江戸時代中―末期の長期にわたり、かなり数多く写されたことが考えられる。はたして、これらが何の目的で写され、どのように利用されたのであろうか。まことに興味深いが、現在のところ筆者には解明できておらず、今後の検討課題としたい。